

H. 内分泌（甲状腺以外）

100

副腎のR I診断とCTスキヤン

石丸 紉、町田喜久雄、西川潤一、田坂 皓
(東大放射線科)

53例の副腎シンチ検査について検討をした。アルドステロン症が疑われた27例中手術で腺腫が確認された7例はすべてシンチ上異常を呈した。手術未施行例および経過観察例20例中12例は腺腫もしくは過形成がシンチ上強く疑われるが、8例はシンチ上、正常範囲内であった。臨床的にクッシング症候群が疑われた21例中、手術で確認された腺腫10例、過形成4例はシンチ上、明らかに異常を呈した。しかし非手術例7例のうち腺腫、過形成を強く疑われた各1例を除き5例はシンチ上正常範囲内であった。シンチ上異常を呈しCT scanを行った8例のうち、手術を施行した7例（腺腫5例、褐色細胞腫1例、脂肪肉腫+正常副腎1例）では手術標本で長径2.9 cmの腫瘍はCT scanでも発見されたが2.2 cm程度では明らかな意味づけはできなかった。副腎シンチは有用な検査であり、特に小さな腫瘍に関してはCT scanより有効と思われるが、他の内科的検査などと併用しなければ副腎以外の疾患を副腎疾患と誤診するおそれがある。

101

副腎病変の局在診断—副腎シンチグラフィ

とX線computed tomographyの比較検討

福永仁夫、滋野長平、藤田 透、播岡敏雄、
百々義廣、中野善久、森田陸司、鳥塚莞爾
(京大、放核)

副腎病変の部位診断及び腺腫と過形成の鑑別について、¹³¹I-Adosterolによる副腎シンチグラフィとGE CT-Tによる副腎部のcomputed tomography (CT) スキャンを行ない、その成績を比較検討した。

症例は、本態性高血圧症3例、原発性アルドステロン症（腺腫）3例、クッシング症候群（腺腫）2例、褐色細胞腫（異所性1例を含む）3例、異所性ACTH産生腫瘍1例、肺癌の副腎転移1例の計13例を用いた。

原発性アルドステロン症、クッシング症候群及び肺癌の副腎転移例の部位診断には、副腎シンチグラフィ及びCTスキャン共に有用性が認められた。

CTスキャンが威力を発揮したのは褐色細胞腫、特に副腎外に発生したものであった。他方、副腎シンチグラフィが有用であったのは、異所性ACTH産生腫瘍の副腎皮質過形成の症例であった。